

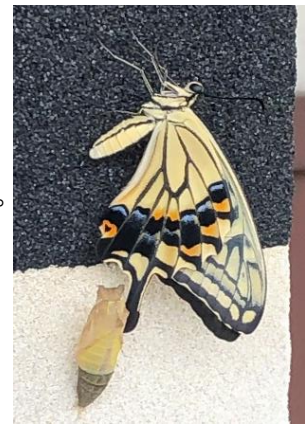
生き生き

NO. 96 令和 元年 1 1 月号 岡崎市現職研修生活科広報部発行

子供の感性を育む

生活科部長 倉地 耕治

今年の夏、本格的に暑くなる直前の7月15日、我が家の玄関でキアゲハの羽化に立ち会うことができました。時間がたつのも忘れて見つけ、そっとスマホのシャッターを切りました。分子生物学者の福岡伸一さんの文章をお借りすると、「その瞬間、音もなく殻が縦に割れ、くしゃくしゃに濡れそぼった蝶がもがきながら巧みに蛹から抜け出す。細い足で必死につかまりながらせわしなく翅や触覚を動かす。まもなく翅脈(しやく)に力がみなぎる。蝶はゆっくりとはばたき、美しい翅の内側を初めて見せてくれる」(『ルリボシカミキリの青』福岡伸一 文芸春秋) のです。生命の尊さを感じる瞬間でした。



玄関で羽化したキアゲハ

学校でも、子供たちの飼育・栽培の活動を通して、命の営みが繰り返されます。植物も昆虫や動物も、子供たちにとって愛おしい存在になっていきます。かつて、ヤマユガを飼育する授業を参観したことがあります。みんな観察に夢中です。そんな中、A君が心配そうに「ぼくの〇〇(名前)は病気かもしれない。だって、フンの数がいつもよりずっと少ないんだ」と発言しました。驚きました。A君は、自分が飼育するヤマユガのフンの数まで毎日数えていたのです。そしてフンの数が少ないことから病気ではないかと疑ったのです。

生活科は「具体的な体験や活動を通して、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を育成することを目指す」のですが、そこに「身近な生活に関わる見方・考え方を生かし」という文が加わりました。この「見方・考え方」が大事です。蝶の羽化を美しいと思い、ヤマユガの幼虫を愛おしむ感性は、具体的な体験を通し、思いをもち、心を動かして身に付けていくものだと思います。2年生からもらったアサガオの種を育て、秋になって取れた種を見て「これで命がつながったね」といった子がいます。この言葉の裏には、どんな体験、どんな感動があったのでしょうか。この子にはアサガオの言葉も聞こえていたに違いありません。「見方・考え方を生かす」とは、このような感性または気づきを大事にすることだと思います。小さいころ身に付けたこのような感性は、生涯にわたって生活を豊かにしていくのだと思います。生活科の授業で繰り返される様々な体験は、自然の美しさ、生命の不思議さ、大人への憧れ、ふるさとへの愛着など、子供たちの感性を磨くものであってほしいと願います。前出の福岡伸一さんは、次のように文章を締めくくります。

「もう虫たちを育てることはないけれど、仕事の行き帰り、植え込みや街路樹の間で、蝶たちに出会うと、ふと足をとめてしまう。ひらひらと低く高く飛び交うその軌跡を追い、視界から消えるまで見送る。」(前出)